

渡辺省亭 —欧米を魅了した花鳥図—

東京藝術大学美術館(上野) 2021.03.27~05.23

岡崎市美術博物館 21.05.29~07.11 静岡・佐野美術館 21.07.17~08.29

「渡辺省亭(せいてい)」(1852~1918)は、16歳時に「菊池容斎」に師事して、その後輸出工芸の下絵図案を制作、1911年パリ万博に出品し銅牌受賞、帰国後は洒脱な筆致に洋風を加味した「花鳥画」を創作した。以後、3回連続の万博で受賞を重ねて海外で高い評価を得るとともに、七宝焼きの図案、木版画、雑誌挿絵なども制作した明治時代から大正時代の日本画家である。

本展は、画伯の生誕170年を迎える期に**欧米を魅了した花鳥画**の大規模な回顧展で、海外に所蔵される貴重な里帰り作品を含め、これまで知られていなかった個人所蔵の作品を中心に、“幻の画家”とも呼ばれていた画業の「**花鳥画十二幅**」が展示されるなど、全貌がはじめて解き明かされる企画である。



渡辺省亭《十二か月花鳥図・三月》 絹本着色 明治時代

月次(つきなみ)の花鳥を適宜取り合わせ、十二幅でひと揃いの作品とするのは「花鳥図の統的様式」で、本作は桜と番(つがい)の雉が描かれている。

渡辺省亭《雪中鴛鴦(せっちゅうえんおう)之図》絹本着色 1909(明治42)年

鴛鴦は雌雄のオシドリで、夫婦和合の象徴とされている。「若冲」の名作は雌雄を離して描いているが、画伯は寄り添って描くように変えている。

渡辺省亭《雪中群鶏図》(せっちゅうぐんけいず) 絹本着色 1893(明治26)年

雪の積もった日に、荷車や車輪に群れ集う鶏の風景は、見えるだけで11羽ほどの雌雄の鶏が鶏冠から羽毛まで絶妙なグラデーションで描かれている。